

STYLING

MONO



マルコ・ザヌーゾとアルフレックス社の「レディ」は1951年にデザインされた。職人による家具作りが連続と続いていたイタリアの家具史において、工業生産を容易にする人工素材を大胆に採用した新しい家具の価値観は衝撃的であったはず。

VOL.25 ARFLEX SINCE1951~

●[アルフレックス]
ARFLEX JAPAN
(SINCE1969~)

Photo/Yoshio Shiratori
Osamu Nagahama
WATANABE/KAZUHIRO
Text/Teruhiko Doi(WPP)

1950年代のイタリア。ここから60年代にかけてのイタリアは元気だった。後の世において、奇跡の復興と称された経済復興を果たした時代であり、国内外のさまざまな産業は活況を呈した。とりわけ芸術やデザインへの関心が高い国民にとって工芸美術展「トリエンナーレ」の復活は大きく注目された。この1951年のトリエンナーレで話題をさらったのは金賞を獲得したマルコ・ザヌーゾという無名のデザイナーと、同じく無名だった「アルフレックス」というブランド。彼らが発表した安楽椅子「レディ」は成形ゴムとエラストティック・ゴムベルトという斬新な手法で作られ、それまでの家具作りとは異なる、新しいインテリア・デザインを誕生させたのである。



1950年代のイタリアの工場

STYLING

MONO

マレンコはジョイントシステムの導入で1人掛けにも3人掛けにもなる多彩なバリエーションが魅力。同時に1日15回の立ち座りを35年間繰り返してもビクともしない、という反復加重実験の結果が信頼を得た。まさにソファの傑作。



1971年発売当時のマレンコ・カタログ写真



Mario Marengo

マリオ・マレンコ
イタリア国内では俳優やコメディアンとして知名度が高いが、デザイナーとしても知られる存在。

アルフレックスというブランドを語る上で欠かすことの出来ない製品がある。それはシンプルな形のソファ『マレンコ』。デザイナーであるマリオ・マレンコが一瞬のうちに描いたスケッチから生まれた、といわれるこの1971年発表のソファは40年経ったいまも多くのファンが愛用している名品である。

おそらく、単品のソファとしての売り上げは世界でも指折りであろう。当初は裏側をタッカーで留める、張り込みで作っていたが、アルフレックスジャパンの製造になってからは、カバリングやジョイント・システム、モールディングといった斬新かつ合理的な手法で、生産技術や品質を飛躍的に向上させることに成功した。特にカバリングのシステムは、日本生産の丈夫なモールディングがあつてこそそのシステム。マレンコを始め、アルフレックスジャパンの製品は、ひとつのソファのカバーを交換することでいつまでも新しく使い続けられるという画期的な方法論を実践している。当然、環境にもやさしい。この2月には名作マレンコを小さくリサイズした『マレンコ・ピッコロ』が発表された。

これは誕生から40年を経過したマレンコを記念し限定で40台だけ発売されるスペシャルモデル。子供用と限定するにはもったいないほどの作りで普通の大人でも、足を伸ばして充分に座れる。狭い室内でマレンコの導入を諦めていた、というような人には朗報だろう。

Marengo Piccolo / マレンコピッコロ
サイズ以外は通常のマレンコとすべて
同じ素材、デザインで約6割にリサイズ。
40台限定。価格9万9750円。
ロゴスタンプの麻、グリーン、レッド、
ホワイトの4色。2月16日より
東京・名古屋・大阪の直営店で展示。
詳細はwww.artflex.co.jp



1951年にマルコ・ザヌーゾによってデザインされたアルフレックスの[Lady]。その斬新で画期的な製法は、後の家具製造の歴史を大きく変えた存在としていまも評価される。



I sedili sono
nel 1951. I modelli presentati alla Triennale su disegno di Marco Zanuso, furono molti, una serie di mobili da giardino in tubo metallico e in legno con mater elastico e, particolarmente significativi, la poltrona Lady e il divano IX Triennale, che ottennero la medaglia d'oro della manifestazione.



Marco Zanuso
マルコ・ザヌーゾ
1945年以降の建築、都市計画および工業製品における黄金時代を築き上げた、イタリアを代表するデザイナー。

STYLING

MONO

アルフレックスが採用する
モールドウレタン(モールドウレタン)は
ヨーロッパ製の家具に多く使われる製造方法。
同社の実験によると、
体重90kgの人の20万回の立ち座りでも
劣化しなかった。



MARENCO/マレンコ(1971年)
左アームソファ+右アームソファ(クッション別)
価格54万8100円。デザイナー=マリオ・マレンコ



MC-AW(1985年)



SONA/ソーナ(2002年)
20 左アームソファ+リラックスタイプ20右アームソファ
価格116万9700円。椅子、テーブル、ミニクッション別
デザイナー=C.O.D



REKTA/レクタ(2003年)
テーブル(ホワイトオーク W1900)
価格30万2400円。デザイナー=カルロ・コロンボ



SIGNAL(1977年)



NUT(1977年)

FIorenZA/フィオレンツァ(1952年)
アームチェア価格40万7400円
デザイナー=フランコ・アルビーニ



VELATO/ヴェラート(2011年)
200アームソファ 価格39万9000円
カバーリングシステム採用。デザイナー=C.O.D.



OMNIO/オムニオ(2010年)
ミックスタイプワイド左右アームソファ。
価格71万8200円。ミニクッション別。
デザイナー=C.O.D & ARFLEX JAPAN R&D



GALE/ガーレ(2008年)
180左アームソファ+リラックスタイプ170右アームソファ。
価格193万4100円。ミニクッション別。
デザイナー=ARFLEX JAPAN R&D

JUNG(1979年)



arflex
DECA ITALIANA



DECA ITALIANA(1979年)

日本における一般的イン
テリアの概念が婚嫁家具の
域を出なかった1960年
代、英文のお洒落なタイポ
グラフィと、VYと
というファッションコンセプ
トで一世を風靡した「V
A
N」の宣伝部に籍を置く一
人の青年がイタリアに渡つ
た。青年の名を保科正とい
う。現アルフレックスジャ
パンの代表である。まだイ
タリアを訪問する日本人な
どほとんどいない時代に、
単身でアルフレックス社の
門を叩き、モダンな家具作
りの方法論と精神を学んだ。
帰国後1969年に「アル
フレックスジャパン」を設
立し、家具の製造販売と同
時に、インテリアという概
念を当時の日本で広めた。
評価すべきは旧来の婚嫁家
具というイメージを一新し
た、国際基準のソファを始
めとするインテリアを日本
に紹介した人物であるとい
うこと。そして本国イタリ
アをも凌ぐ信頼性の高いモ
ノ作りを日本で行い、イタ
リアのアルフレックス本社
が現地製造を認めた唯一の
現地法人であるという点だ。



中央が若き日の現アルフレックスジャパン代表である保科正氏。左は技術開発担当の責任者だったロベルト・プリンチピ、右は製作部長だったマリオ・ブルツィオ。1967年撮影

MONO



アルフレックス製品についての問い合わせは
アルフレックスジャパン
☎0120-33-1951
http://www.arflex.co.jp



北海道旭川市にあるアルフレックスジャパンのファクトリー。

イタリア家具の歴史を変えたアルフレックス

家具の歴史はその誕生から長い期間、貴族が抱えていた工芸の職人たちの歴史でもあった。木工を主体とした旧来の家具はしかし新しい素材と革新的な技術、デザインから大きな洗礼を受ける。アルフレックスが発表した一脚の椅子がすべての始まりだった。

STRIPS (1979年)
チニ・ボエリのデザイン



発がスタートしていた。家具に人工素材を用いるザヌーゾの研究をサポートしていたのは、タイヤメーカーの「ピレリ」である。ドイツとアメリカで研究されていた加硫製法、つまり合成ゴムをヒントに、成型ゴムとエラストック・ゴムベルト

FOURLINE (1964年)
マルコ・ザヌーゾのデザイン



ムツソリーニ政権の崩壊からイタリア共和国の誕生、戦後の混乱の中からようやく立ち上がるうとしていたイタリアで再開された1951年の工芸美術展トリエンナーレ。アルフレックスはそんな時代に華々しくデビューした。イタリアの伝統的な椅子を作り続けていた職人たちに大きな衝撃を与えたアルフレックスの「レディ」は、設計者のマルコ・ザヌーゾによって3年前の1948年には研究・開

(伸縮性のある帯ひも)の組み合わせで、椅子やソファの素材としての実用性を研究していたのだ。当時、家具のデザイナーとしては無名のマルコ・ザヌーゾを起用した、アルフレックス創始者のアルド・バイ、ピオ・レジヤニの判断は慧眼だったといわざるを得ない。なぜならば、自然素材を中心とした木工が主体だった家具の製造がこれ以降、工芸から工業製品へと変化したからである。つまり現代へと続く家具のルネサンスが、彼らによって始まったのである。しかもそれは、アルフレックスにとってもザヌーゾにとってもゼロからのスタートだったというのだから驚きだ。同じ時期にアメリカでは、イムズ夫妻がプライウッドを使った量産型の椅子を発表して注目を集めていたが、自然素材以外の人工素材で家具を作り上げたという点では、アルフレックスとザヌーゾの試みは衝撃的だったといえるだろう。進取の気性というべきか、実験的スタンスというべきか、こうした企業として過去のスタイルに囚われない製品作りは、その後のアルフレックスの製器開発において随所に見受けられる。たとえば巨匠フランコ・アルビーニを迎えてデザインされた不



上:MARTINGALA (1954年)デザイナーはマルコ・ザヌーゾ。下:北海道旭川の工場内では、すべての社員が白衣を着て家具の製器に当たっている。



朽の肘掛け椅子「フィオレンツァ」カバリングのアイデアが活かされ1954年のトリエンナーレで金賞を獲得したマルコ・ザヌーゾ設計の「マルティンガラー」と「スリーボマティック」など。60年代に入るとチニ・ボエリという優秀なデザイナーとの邂逅があり、内部のフレームを廃しポリウレタンフォームで成型されたモノプロックチェアをイタリアで初めて製品化した。現在のアルフレックス製ソファの原点である。女性デザイナーであるチニ・ボエリは70年代に入ってもアルフレックスと密接な関係を持ち、成型ゴムから始まってスラブウレタンモールドなどの革新的な技術を使って家具ブランド・アルフレ

ックスの成功はもちろん、イタリア家具の流れを大きく変えることにも貢献した。近代家具の先駆けとして、アルフレックスは歴史にその名を刻んだのである。アルフレックスジャパンはこうしたイタリアの革新的技術をさらに発展させ、遂には本国からそのクオリティの高さを認められる存在となる。1969年に青山にオープンした「シヨップアルフレックス」は衝撃的なモダンライフを提案。先鋭的な感性を持つ人々から大いに注目を集めた。日本のモダン・インテリアはアルフレックスの手によって幕を開けたのである。